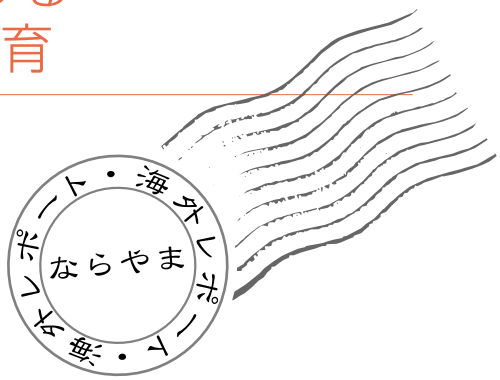
イギリスにおける マイノリティ教育

学校教育講座・助教授
渋谷　真樹



身をもって文化間移動を体験

イギリス以外の文化的背景をもつ人が三五％にも及ぶというロンドンに降り立ったのが、木枯らし吹きすさぶ十月。

学生時代を過ごした懐かしい場所に帰るつもりで、喜び勇んで足を踏み入れたのが逆に災いしたのか、図らずもしばらくのあいだ心身のバランスを損なってしまいました。

これまで、文化間の移動と、そこで形成されるアイデンティティについて研究をし、自分自身でもそれなりの経験をしてきたつもりでいましたが、今回の渡英で、アイデンティティというものが、その場の状況や他の人々との関係の中で生み出される、決して固定することのないおそるべき流動体であることを、改めて痛感させられました。

学校で活かすための研究

受け入れ先のロンドン大学では、マイノリティ教育にあたっている現職教員のためのコースに参加しています。

イギリスにおいても、マイノリティ教育担当の教師たちは、学校の中で周辺的な立場に置かれることが多いようです。講師のロジャー・ウェストさんによると「そうした教師たちの専門性や地位を高めるためには、それにふさわしい教師教育や資格が求められている」とのことです。ロンドン大学での取り組みは、その最先端をいくものといえましょう。

自分たちの学校の取り組みについて話し合う参加者たち

このコースでは、それぞれの教師たちが培ってきた経験をもとに、理論や政府の施策を学び、講師や他の参加者と議論を深めることによって、自らの職場に反映できる展望を得ることを目的にしています。そのため、五日間の講義やワークショップの後には、自分の学校を対象にして、改善すべき点を挙げ、それを実現するための具体的方法を論じる小論文が課されています。いわば、研究と実践が有機的に結びついたアクション・リサーチが目指されているのです。

マイノリティ教育の実践

先日、受講者のひとりであるパット・クロス先生のご好意により、勤務先のヘーゼルバーグ・ジュニア・スクールを見学させていただきました。

クロス先生の部屋には、複数の言語による絵本や算数の教材のほか、さまざまな文化についての資料や、教員向けの書籍がそろっていました。先生は、渡英したばかりの子どもに面接して、その子の英語力や学習歴を調べたり、教室の中に入って、まだ英語が充分でない子どものサポートをしたりしています。イギリス政府では、このようにマイノリティ教育に専門にあたる教師を雇用するために、特別の予算をつけているのです。

同じロンドン大学で一年間研修して、「日本はイギリスのように多くの移民を受け入れるべきではない」という結論に達した、という研究者のことを人づてに聞きました。

しかし、日本にはすでに多くのマイノリティが生活しています。また、今回の私のように、海外で仕事や勉強をする日本人もたくさんいます。少なくとも、そうした人々を排除するのではない展望を得ることができるように、研究をすすめていきたいと思っています。

アメリカの体育教師教育カリキュラムとアセスメント

保健体育講座・助教授
中井　隆司

アメリカの体育教師教育との出会い

「明日の朝も七時半にオフィスだからね　ＴＡＫＡＳＨＩ！」この四ヵ月間、毎夕方の聞き慣れた言葉です。

学生がこれまでの授業で習得した保健体育教師に必要な授業についての知識とパフォーマンスをもとに、実際の児童・生徒がいる実践の場で授業力量をつける授業（模擬授業）に一緒に参加しているからです。

驚くのは、この授業が月曜日～金曜日までの毎日朝八時から正午過ぎまで、それが四ヵ月間、保健の授業から始まり、高等学校の体育授業、小学校の体育授業、そして障害者の体育授業と続いていることです。

さらに驚くのは、これだけでは終わらず、次のセメスターでは、この後に小・中・高等学校の教育実習がまだ十六週間待っています。

ジョージア州立大学体育教師教育カリキュラム

アメリカ南東部の経済都市アトランタの中心街ダウンタウンに広大なキャンパスと六つのカレッジ、二万七〇〇〇人の学生が在籍するジョージア州立大学があります。

二〇〇三年八月一日から二〇〇四年五月三十一日までの予定で、文部科学省在外研究員として、このジョージア州立大学で「体育教師教育カリキュラムとアセスメント」について勉強する機会に恵まれました。

保健体育教師教育専攻はCollege of Educationの保健体育学部の一専攻として計五人の専属スタッフによって行われています。

ここでは、幼稚園から高等学校、さらには障害児を対象とした保健体育教師を一貫して養成するシステムが採られているのです。

保健体育学部に入学した学生は、一・二年生で、主に教養教育と教育学のコア・カリキュラムを履修したあと、一定の基準をクリアーした学生だけが、三年生からこの保健体育教師教育専攻に入ることができます（約一割）。

カリキュラムは、模擬授業もそうですが、全ての授業科目が、常に実際の体育授業を想定した実践的内容で構成されています。

例えば、実技系の授業でも個人の実技能力向上より各運動領域の指導に必要な課題づくり、場面設定、時間配分、集団づくり、指導方法に重点が置かれ、グループ別に作成した課題をすぐに子どもたちを対象に実践することで、そのノウハウをリアルタイムで習得していきます。授業回数も、一回百五十分の授業が週二回、十六週間と充分に確保されています。

Movement & Rhythmsの授業で自分たちの創った課題を子どもたちに指導している学生たち

教師教育に責任をもつということの意味の実感

既にご存じだと思いますが、アメリカでは各州ごと、各大学ごとに教師教育のシステムが異なります。

共通しているのは、学生に「実際に授業をするうえで必要な知識と力量」を養成システムで身に付けることができたのかどうかを厳しく自分たちで問う、つまり、アセスメントが徹底しているということです。

その結果に基づいて、授業内容の変更、授業科目の新設・廃止、授業回数、授業時間、単位数などを大学の教員たちが議論を重ねてみんなで創り上げています。「大学の教員が教師教育に対して責任をもつ」という意味を実感した気がします。

模擬授業で指導教官や仲間に見守られながら授業をする学生